

JOGADOR NO.3 / el capitán 鈴木寿毅インタビュー

2008 年 将

[インタビュー＝塩田英美・吉岡克洋]

[撮影＝中野成博]

[構成＝中野成博・吉岡克洋]

西日が差し込む駒澤大学玉川グラウンド。練習試合を終え、ゴール脇でゆったりとストレッチをこなす新キャプテンは、時に談笑し、時にピッチでプレーする部員達に真剣な眼差している。彼が感じてきた駒大サッカーとは。その先を突き詰め、伝えていかなければならない大切なこととは一。

サッカーの傷は、サッカーで癒すしかない。

1月10日、インカレ準決勝。同点にあと1点差まで追い上げる駒大。頭を丸めた背番号13は、最後の最後までボールを前線に送り続けた。そして、敗戦。男の頬を伝う涙は止まることがなかった。昨年、シーズン終盤に差し掛かったある試合後に、八角剛(08年卒・現横浜FC)は「今更かもしれないけど、メンタル的な部分をまとめ切れなかったのが凄く悔しい。今の自分のできることに?今年色々言ってきたけど、今はみんなやる気になってるから」と、何か遠い過去を見ているような目で語ったことがあった。そんな彼の姿勢を、男は確かに感じ取っていた。

「やっぱり一人一人が責任感持ってやれてれば、更にチームは強くなっただろうし、一人だけやってちゃだめだというのを伝えたくったと思うんですよ。ハチさんはハチさんなりに最後のほうは凄く気持ちだして、駒大らしいプレーもして、周りもそれは感じてただろうし、みんながそういう意識でやれば困らないと思うんですけど。現時点でまだできてないし、去年とあまり変わってない部分もあるから、改善しないといけないですね。ここでネジまきなおしてやらないと」

あれから1ヶ月。春の暖かさが漂うも、夕刻になると多摩川から冷たい風が運ばれてくる駒大グラウンド。耳を澄ませば、鈴木寿毅はチームを引っ張る新キャプテンとして動いていた。駒大に対する熱き思い。今、何が彼を突き動かしているのだろうか。その話に耳を傾けると、実に感慨深い答えが返ってきた。